バージニア州立大学留学体験記

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野　土　田　純　子

この度、東北がんプロフェッショナル養成推進プランのご支援のもと、バージニア州立大学の生化学・分子生物学の研究室（Sarah Spiegel主任教授、高部和明准教授）、腫瘍外科（Harry Bear主任教授、高部和明准教授）に八日間の短期留学をさせていただきました。Sarah Spiegel教授はスフィンゴシン－1－リン酸という脂質シグナル伝達物質に関する研究の世界的権威です。Harry Bear主任教授は乳癌、消化器癌をご専門にされており、National Surgical Adjuvant Breast and Bowel Project（ＮＳＡＢＰ）では全米の乳癌の臨床試験を主導されています。高部和明先生は新潟大学第一外科の先輩であり、アメリカで外科レジデンシー、腫瘍外科フェローシップを修められ、現在はバージニア州立大学の腫瘍外科及び生化学の准教授としてご活躍中です。また高部先生の研究室には、当科の永橋昌幸先生が平成二十六年四月までご留学されていました。

今回の留学の目的は、①アメリカの腫瘍外科施設で自分の研究成果をプレゼンテーションすること、②腫瘍外科臨床及び基礎研究の見学を行うことでした。

今回の研修における最大のイベントは腫瘍外科でプレゼンテーションを行うことでした。このたび私は日米のマンモグラフィ検診開始年齢の違いとその意義に対する研究成果を発表しました。プレゼンテーションは高部先生とのビデオ会議を毎週行い、渡米三か月前より準備しました。高部先生からプレゼンテーションで大事なのは「相手にとって有益な情報を伝える」ことであることや、それを実現するためのいくつかの技法を教えていただきました。ご指導のおかげで、腫瘍外科の先生方からプレゼンテーションの内容について関心を持っていただき、多くの有益なコメントをいただきました。

腫瘍外科でのプレゼンテーションに向けて、マンモグラフィ検診に関して重点的に調べ、かなり勉強してから渡米しましたが、アメリカの外科レジデントに「マンモグラフィ検診についてどう思う?」と問いかけると、突然の質問にも関わらず、最近のトピックスを踏まえた上で自分自身の意見を述べてきたので驚愕しました。検討会では、心臓血管外科医が胃癌手術の合併症について考察する場面もありました。アメリカの外科医は、専門外の話題であってもディスカッションできるだけの知識をしっかり体得しています。アメリカの専門医研修システム（レジデンシー）は五年制でその間にＥＢＭに基づいた標準治療を体得しなければ卒業できません。外科学全般の治療を学ぶシステムが確立していることと、外科専門医試験がとてもハードであることなどから、日頃から幅広い知識を必要とされ、そのトレーニングの中で自ずと外科全般の知識が体得できるようでした。

留学中には高部先生の外来の見学や学生の臨床実習を見学させていただきました。また、乳房温存手術の断端評価において日米で違いがあるのか興味があったため、病理医のDavis Massey准教授を訪ね、アメリカにおける実際の病理検索法を教えていただきました。

フローサイトメトリー部門や、共焦点レーザー顕微鏡などを多数備えた顕微鏡部門を見学し、実際に顕微鏡を使わせていただきました。Dr. HylemonやDr. Spiegelの研究室のミーティングに各々参加しました。ミーティングでは提示されたスライド一枚一枚に対し、詳細な質問や活発な議論が飛びかっており、その探究心がインパクトのある研究成果を生み出す原動力なのだと実感しました。理屈に合わないことには疑問を持ち、徹底的に質問する姿勢には感銘を受けました。

National Institute of health（ＮＩＨ）の日本人研究者の会であるＮＩＨ金曜会では、永橋先生がご自身の留学経験、研究に関するご講演をされ

ました。永橋先生が一歩ずつキャリアを積み重ねてこられた過程を知ることができ、金曜会の方々からも大変好評でした。

帰国後は腫瘍外科検討会でプレゼンテーションした内容を、総説論文という形でまとめました。論文執筆を進める中で、今後も乳癌の検診や診断の分野における研究をさらに続けたいという思いが強くなりました。

今回の研修では、当初想像していたもの以上の学びがありました。英語での発表やディスカッション、論文執筆への苦手意識が解消されただけでなく、一つのテーマを掘り下げることで学問の楽しさを実感しました。また、リサーチの意義について、今まであまり理解していなかったことに気が付きました。医学研究は未来の患者を救うために行うものであり、患者が何を必要としているかを知っている臨床家としての役割は大きいと思います。真実を求める探究心と、目の前の患者にまっすぐ向き合う姿勢をもって、広く医学に貢献できるよう研鑽を積んでいきたいと思います。

最後にこのような貴重な機会を下さいました若井俊文教授、ご指導賜りました高部和明先生、永橋昌幸先生に深く御礼申し上げます。

（平成二十六年入会）